

新垣修

『フリチョフ・ナンセン  
—極北探検家から「難民の父」へ』

(太郎次郎社エディタス、2022)

吉田 英生 (京都大学名誉教授)

## 1. はじめに

フリチョフ・ナンセン——何をした人なのか？と問われると、とても一言では答えることができないが、Wikipediaの冒頭部では最小限かつ的確に以下のようにまとめている。

フリチョフ・ナンセン (Fridtjof Wedel-Jarlsberg Nansen、1861年10月10日-1930年5月13日) は、スウェーデン統治下および独立後のノルウェーの科学者、探検家、国際政治家。1893年から1896年にかけてフラム号による北極遠征を行ったことで有名。(評者注:「フラム:fram」はノルウェー語で「前へ」である。)

実は、このとてつもない巨人の情報は、膨大な情報が氾濫している現代にあっても、わが国では容易には得られない。日本語の本に関する限り、少年少女向けの偉人伝を除けば、あとは当人による「フラム号(北極)漂流記/北極海横断記」(1960、1973、1986、1998、2002)やA. G. ホール著「ナンセン傳」(1942)などを数える程度、しかも現在それらは例外なく絶版となっており、図

書館や古書店で入手するしかない。ということは、いまの日本で、その偉業を広く深く理解する人はほとんどいないと推論してまず間違いないだろう。

そんな中、待望の書が出た。新垣修 国際基督教大学教授による標記の書である。新垣氏は、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR: The Office of the United Nations High Commissioner for Refugees) 勤務時代(1991-1994)にナンセンの人生の全体像に出会って以来、ナンセンに強い関心を持ち続けてきたという。しかし、本書の執筆を決意したのは、2019年のクリスマス休暇直前にオスロ郊外にあるフリチョフ・ナンセン研究所に立ち寄って「ナンセンが生きた場所の空気を肺にたっぷり吸いこ」んだときだった(304頁)。それからほぼ3年後、本書は上梓された。

評者は以前からナンセンを尊敬し、その生涯と仕事をもっと知りたいとは思いつつ、洋書にまでは手を出さずじまいであった。しかし本書に気づくやいなや無我夢中、一気に読了した。本書は、評者にとって、単にナンセンに関する知識を得たいという願いを越えて、さらなる感動をもたらしてくれる希有の書であった。そこで、書評もぜひ

とも書かせていただきたいと願った。なお、国際平和研究に関する紀要中での書評ではあるが、評者の専門分野は工学（熱力学・流体力学）であることを最初にお断りさせていただく。工学分野の人間が本紀要に投稿することは、おそらく過去になかったと思われるからだ。しかし、幅広く諸分野の人間を引きつけるところが、ナンセンのナンセンたるところでもある。それに、そもそも本書自体が、国際法学・国際関係論を専門とする新垣氏により著されたものの、その分野の専門書というよりは、多彩な顔を持つナンセンをダイナミックかつ感動的な筆致で描いた評伝といった方が適切であろう。後述するように、新垣氏の専門と深く関わるのはナンセンの生涯後半ではあるが、氏の筆はナンセンの全生涯にわたって冴えわたり、読者をナンセンの世界に一気に引き込むに違いない。

## 2. ナンセンの生きた時代のノルウェー

ナンセン当人以上に、北欧に分類されるノルウェーという国についても日本ではあまり知られていないと思われるので、最初に補足しておこう。スウェーデンに世界の目が集まるノーベル賞——その中で平和賞だけはノルウェー政府が中心となり首都オスロで授賞式が行われることから、ノルウェーとスウェーデンは特別な関係にあることが一般には理解されていよう。しかし歴史的には世界の常として複雑な紆余曲折があった。1397年、北欧3国のカルマル同盟成立後、ノルウェーはデンマークの支配下となる。しかし1814年、ナポレオン戦争で敗れたデンマークは、ノルウェーをスウェーデンに引き渡した。この結果、ノルウェーはスウェーデンとの同君連合となったが、ナンセンがフラム号の航海を成功させたころ両国間は緊張し、ノルウェー国民はスウェーデンからの分離独立を望んでいた。

科学分野におけるノルウェーの重要性についても一般にはあまり知られていない。ナンセンとほぼ同時期に活躍したウィルヘルム・ビャークネ

ス（1862-1951）を中心とするノルウェー（ベルゲン）学派は、近代気象学・海洋学の世界的な中心だった。ために、ナンセンのフラム号探検で得た観察はこのベルゲン学派——とりわけスウェーデン出身のヴァン・ヴァルフリート・エクマン（1874-1954）にも継承されて地球物理学上の大いなる成果につながるが本書でも紹介される。なお、本書では割愛されているが、エクマンによる海洋流に関する理論は地球規模のエルニーニョ現象／ラニーニャ現象考察の基礎ともなっていることを、流体力学を専門とする評者の視点からはぜひとも付記しておきたい。

## 3. 航路標識

前述したフラム号の航海は、30代のナンセンが北氷洋の未知の海域の海流や気象を観測・調査することを第一目的として、あえてみずから船を流水の中に「氷結」し、そのまま「漂流」する（結果的に期間は3年あまり）という、まずだれも考えることのない独創極まるとともに忍耐強いプロジェクトであった。本書では、この漂流のイメージをナンセンの生涯全体にも重ね合わせ、随所に巧みな表現を挿入させながら、ナンセンの69年近い人生航路を興味深く読み進むことができるようになっていっている。そこでまず、目次——本書中の言葉を借りて「航路標識」を概観しよう。

### 目次

はしがき

第1章 人生の出航

第2章 グリーンランド横断

第3章 前へ！ 極北へ

第4章 学者として

第5章 外交官として

第6章 捕虜の帰還

第7章 ロシア飢饉

第8章 難民支援

第9章 住民交換

第10章 前へ！平和へ

第11章 永遠への出航

あとがき

年表・チャート、参考文献・資料

上記の章立ては基本的には時系列としている。第1章は誕生からフレデリク王立大学（現オスロ大学）に入学した20歳過ぎまでのナンセン、第2～3章は探検家としてのナンセン、第4章は学生時代から晩年まで一貫して科学者であり続けたかったナンセン、第5～10章は国際政治の渦に巻き込まれるナンセンを描き、第11章の結びにつながる。ただし、第4章はナンセンの生涯全般に及び、第5～10章は相互に関連して同時進行する場合も少なくない。

ナンセンが、あまりにも多面的で活動的な生涯を送ったので、その全体像をスッキリと整理して描くのは至難であったことは容易に想像できる。しかし、熟考された自然な章構成に加え、巻末に用意された「年表」と「1917年-1923年ころのチャート」も貴重で、とても分かりやすいものとなっている。まさに、著者自身の言葉——「現在地」を確認し、「進路からの逸脱」や「難破」を極力回避していただきたい（8頁）——というように、本書を貫く「漂流」のイメージに呼応するとともに、読者にはそうはさせないという配慮といえよう。

#### 4. 国民を奮立たせた英雄であり、生涯にわたって偉大な科学者（第4章まで）

ナンセンの偉大な人生航海の出発点は、もちろんフラム号である。そして1896年、フラム号の航海途中、ナンセンはヨハンセンと二人だけ下船し北極点に接近した後フランツ・ヨーゼフ・ランド経由で帰国。そして途中で別れたフラム号もその1週間後に帰還した。この成功は、スウェーデンからの分離独立を目指していた国民を奮立たせた。ナンセンは当時34歳であったから、結果的に

ちょうど人生の中間点。以後のナンセンは、その栄光ゆえにノルウェーのみならず世界の国際政治の中にいやがおうにも引き込まれることになる。

しかし、著者が強調するのはむしろ、ナンセンの生涯にわたる科学者としての情熱と実績である。対象分野は、動物学、地質学、解剖学、神経科学、1897年には母校に動物学教授として戻るが1908年には海洋学教授に異動。国際政治の世界に引き入れられた後は、国際関係論や地域研究、政治経済学、平和学を含む。著者は後の第11章で「目の前にある対象の仕組みを解き明かそうとする彼のあくなき探究心の前では、文系/理系あるいは学術分野という区分は、さほど意味をもたなかったのだろう」と述べる。まさに共感を覚える表現だ。なお、ナンセンの博士論文「中枢神経系の組織学的要素の構造と組み合わせ」（1888年）は、後年ノーベル・生理学・医学賞の対象となっても不思議ではない内容であったという。

#### 5. 独立の実現、英国大使から大学に戻るも再び国際政治の舞台へ（第5章～第9章）

前述の独立運動の中心にいたナンセンは、1905年に政府からデンマークへの特使を命じられる。そしてデンマークのカール王子をノルウェー王ホーコン7世として招き入れ、ノルウェーを独立に導いた。さらに翌1906年には在英大使となるが、英国との安定的関係を確たるものとしたことで1908年には大使を辞し、フレデリク王立大学での研究生活に戻る。しかし1913年、ナンセンは西欧州と内シベリアを結ぶ安全な貿易ルート調査の旅に参加したところ、予想外にもロシア北部奥地で生活していた「難民」に出会って衝撃を受けた。このことが、翌1914年に開戦した第一次世界大戦下や1917年のロシア革命などによる国内・世界情勢の激変とともに、ナンセンの2回目の転換を促すことになる。

第一次世界大戦中の1917年以降、すなわち当

時55歳だったナンセンが再び国際政治の舞台に呼び戻されて以降が、本書の約半分を占めるとともに、著者の執筆動機に強くつながった部分である。この期間のナンセンの複雑な動きを俯瞰するには、前述した本書巻末の「1917年-1923年ころのチャート」が参考になることを強調し、以下では簡潔に述べたい。

1918年、連合国（フランス、イギリス、なおロシアは国内の革命のため途中離脱）が中央同盟国（ドイツ、オーストリア、ハンガリー）に勝利したのち、反革命・反共主義的なベルサイユ体制下、ナンセンは国際連盟を「新しい船」と呼んで、英国の若手の同志フィリップ・ノエル＝ベーカー（1889-1982）とともに、法による平和の達成を信念として設立に尽力した。まず1920年、ナンセンはロシア＝ソ連によりシベリアに残されていた中央同盟国側の捕虜を帰還させる捕虜帰還高等弁務官に就任、次いで1920年にレーニンが率いる革命軍（赤軍）に敗れた反革命軍（白軍）らが難民となったため1921年にロシア難民高等弁務官にも就任。さらに、同じく1921年、ロシア＝ソ連で起こった饑饉に対処するためロシア飢饉救済事業高等弁務官（ただし市民社会組織）にも就任し、これら弱者の救済に八面六臂の活躍をしたのである。その貢献に対して1922年にはノーベル平和賞を受賞したことは当然であろう（なお、同志ノエル＝ベーカーも1959年にノーベル平和賞を受賞した）。ナンセンの世界的な人道支援は、その後も、アルメニア系難民、ギリシャ・トルコ住民交換など続く。パスポートを持っていない難民の無国籍状態を救うべく発明されたナンセン・パスポートにより、1922年から1930年までの間に50万人近い難民が救われたという。

## 6. ナンセンの知の翼 (はしがき、第10章～第11章、あとがき)

嘆かわしいことにナンセンがノーベル平和賞を

受賞した100年後の2022年2月、ロシアによるウクライナ侵攻を機に兄弟姉妹国間で戦争が始まった。さらに本書評を執筆中の2023年10月には、パレスチナのスンニ派イスラム原理主義・民族主義組織であるハマスがイスラエルに侵攻したことが発端となり、ガザ地区とイスラエルとの間で一般市民の多数の死を伴う悲惨な戦争が続いている。そのガザ地区は1993年の「オスロ合意」に基づいてパレスチナ自治区と認められただけに、ナンセン／ノルウェーとの二重に悲しい因縁も感じる。

ナンセンが生きた時代は第一次世界大戦とロシア革命に象徴される激動の時代であったが、科学技術が飛躍的に進み世界各国・民族間のコミュニケーションが促進され相互理解が深まっているはずの21世紀において、20世紀後半の冷戦時代よりさらに恐ろしいとも思われる混迷極まる時代に再突入している。著者は、はしがきで次のように述べる。

本書は、ノスタルジックな人物伝でも、ヒーロー礼賛の偉人伝でもない。フリチョフ・ナンセンという人間——私たちと同じひとりの人間——が進んだ人生航路をたどり、21世紀のいま、彼から受けとるべき伝言を拾い集める旅である（7頁）。

さらに著者は、むすびの第11章で次のようにも述べる。

「知の翼」を持つ人びとは、旅路の途中でさまざまな垣根を越えていく。いや、「垣根を越える」という意識すらなく、ただ空間を縦横無尽に飛ぶ。（中略）そしてナンセンこそ、そのひとりである（291頁）。

前へ（fram）！ 平和へ——本書が一人でも多くの人々に読まれることを願ってやまない。